

地理学会ニュース 2015年度 第4号

法政大学地理学会 2016年3月31日発行

会 告

法政大学地理学会
会長 佐藤典人

2016年度定期総会

下記の通り、2016年度定期総会を開催します。

記

◎日 時：2016年5月14日（土）
16時20分～17時20分

◎会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス
55年館542号教室

◎第5回法政大学地理学会・学会賞授与式
(最優秀卒業論文賞)

◎議 題：1. 2015年度事業報告
2. 2015年度決算報告
3. 2015年度監査報告
4. 2016年度事業計画および予算案
5. その他

※なお、当日は総会に先立ちまして、次段の行事（特別講演）が予定されています。万障お繰り合わせの上ご参集いただきますようお願いいたします。

また、総会終了後、懇親会を開催する予定です。多数ご参加下さいますようお願い申し上げます。会場や会費などの詳細に関しましては、当日受付・掲示などでお知らせいたします。

特別講演

◎日 時：2016年5月14日（土）
15時00分～16時頃まで

◎会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス
55年館542号教室

◎演者 佐藤典人（法政大学文学部教授）

◎演題 「似て非なる自然の諸相・NZと日本」

2015年度法政大学地理学術大会報告

2016年2月20日（土）、法政大学市ヶ谷キャンパスにて2015年度法政大学地理学術大会が開催されました。当日は朝10時から卒業論文発表が始まり、途中、13時30分から15時にかけての学会賞（優秀卒業論文）発表をはさみ、17時20分まで、総発表数100（卒業論文発表76、一般発表6、ポスター発表18）に及ぶ、大変にぎやかな大会となりました。また、18時から懇親会が催され、その中では最優秀卒業論文の発表、学会役員等からの講評も行われ、夜遅くまで懇親を深めるとともに、大変有意義な時間を過ごすことができましたと思います（最優秀卒業論文の表彰は5月14日の法政大学地理学会総会にて）。

今大会で最優秀卒業論文に選ばれたのは、今村友則「三国山脈平標山における雪食裸地形成のプロセス」です。その他、3本の論文が優秀卒業論文として表彰されました（川村沙紀「冬季の日本海側地域における帯状雲発現の際の海面水温分布と降水量分布の特徴」、番匠岳大「伝統的町並み保存地区における観光空間の創造—

金沢市ひがし茶屋街を事例にー」、稲村航平「タイ・バンコクにおける日本人バック・パッカー観光客の行動パターンの差異ー日本人宿を事例にー」。

今大会の総参加者数は275名（学生223名、一般学会員他52名）で、ここ数年の大会の中では最も多いほうの参加者数を得ることができました。また、例年、見過ごすことのできないレベルにあった当日の発表者欠席ですが、今年度は実質2名（6名欠席のうち留年による欠席が4名含まれる）にとどまり、その点からも学生がよく頑張ったと言えます。

今大会の課題としては、懇親会参加者数が69名と例年よりも少なかったこと、それに関連する部分もありますが、発表者が自分の発表時間だけしか参加しないケースがあり、大会を通じての参加者が限定的であったこと、加えて各種事情があるにしろ、教員の参加も限定的であったことでしょうか。1年生の参加者がほとんどいなかったことや、2、3年生の出席も半分程度に限定されたことなども今後の課題です。最後に、学会員による発表数が少なかったこと（一般発表は6つ、そのうち4つは大学院生の発表）が最大の課題と言えるでしょうか。会員の方には会場へ足をお運びいただくだけでなく、ぜひ発表をしていただけることを強く希望します。発表内容はアカデミックな内容ばかりでなく、より生活や仕事に根ざした一般的内容ではあるものの、地理教育分野に関連するものなどもあろうかと思えます。次年度の大会での発表をお待ちしております。

（大会実行委員長、集会委員長：伊藤達也）

＜地理研究の最前線 第8回＞ 都市地理学からの都市研究（小原文明）

何回か前の号のこのコラムにて、中俣先生が「研究の最前線」とのタイトルをどう受け取ってよいのか迷うと記されていたが、いざ自身が執筆することになると、確かに、どのように解釈してよいのか考えてしまう。一応は地理学の研究ならびに教育に携わる者として、筆者の専門領域である人文地理学、とりわけ都市地理学に関する研究の現状（≒都市地理研究の最前線）

について記すことはできると思うが、ただ、それは主として他者の研究について字面だけ紹介することになってしまう。そこで、今回は「自身の地理研究の最前線」と解釈することとし、筆者にとっての地理研究の最前線をお伝えすることでご容赦願いたい。とはいえ、現時点の話だけでは紙幅を満たすことはできないので、これまでに筆者が取り組んできた研究についても触れて説明をしていく。

前述のように、筆者の専門領域は都市地理学に分類されるであろうし、そのように名乗っているが、気持ちの上ではUrban Studies（都市研究）を専門にしていると思っている。このことは自身が都市地理学者であることを否定しているのではなく、Urban Studiesを地理学の立場から行っているという意識の表出である。このような意識は、筆者が学際的な組織で学んできたことに由来する。

ひとくちに都市地理学と言っても、その分野に分類される研究は多種多様である。簡単に言えば、「地理学的手法による都市に関する研究」が広義の都市地理学研究として分類されると考えてよい。また、「都市に関する」という部分には2つの捉え方があり、都市を単位として捉え、都市そのものについて分析する研究（＝都市を点として捉える研究）と、都市を研究対象地域として捉え、その地域で生じている事象について分析する研究（＝都市を面として捉える研究）とに分けられる。近年の都市地理学では後者の研究が大半を占めるが、あくまで都市は研究対象地域であり、分析テーマ・内容は経済地理学的や社会地理学的、政治地理学的、文化地理学的、人口地理学的なものなど様々である。つまり、都市地理学的研究に分類されるものの、それらの研究に従事する者の中には自身の専門分野を都市地理学と認識していない者も多いと考えられる。

さて、前置きが長くなったが、以下、筆者の研究について記していく。筆者は大学院進学後から都市について関心を抱き、都市研究に従事することとなった（卒業論文ではグリーン・ツーリズム（＝農村地域が研究対象地域）について研究した！）。関心事項はこれまで一貫しており、その内容は、①都市における空間・場所の成り立ちについて、②その空間・場所の変化と

その意味について、③都市の空間・場所の変化ならびにあり方から読み取れる時代の意味について、④都市の空間・場所の成り立ちや変化に関わるアクターについて、に大別できる。関心事項は一貫しているとはいえ、具体的な研究内容は経済地理学的なものや社会地理学的なもの、政治地理学的なもの、歴史地理学的なものなど様々である。よく言えば関心が広いと言えるが、どれも中途半端な状態とも言えよう。かつて、筆者は恩師の一人から、「40歳頃までは研究テーマを固めずに色々な内容に関心を払い、その後はそれらの中から一生もののテーマを掘り下げて研究するのがよい」と助言を受けた。「色々な内容に関心を払い」という部分では恩師の助言に従っているように見えるが、まだ「一生もののテーマ」には辿り着いていない点を考えると、都市研究に従事する者としては、やはりまだ中途半端な状態であると考えられる。しかし、多様なテーマ・内容を摘み喰いしてきたことにもよい面がある。中途半端ながらも色々な手法や資料を基に研究を行ってきた経験は、学生が卒業論文などの研究に取り組む際の指導に役立てられるという教育面での利点がある。

筆者が都市に関して最初に関心を持ったテーマ・内容は土地利用や都市開発などについてであり、あくまで空間構造や空間的变化といった形態論に留まっていた。その後、都市開発、とりわけ都市再開発を対象として研究を進めていく中で、関心事項が空間形成や空間的变化だけでなく、再開発に見られる経緯や戦略性などにも広がっていった。そして、多くの再開発の事例を分析するにつれ、都市再開発の意義とは何であるのかという命題に直面してしまう。厄介なことに、この命題の解答は一つではない。再開発に様々な形で関わるアクターごとに意義は異なるし、また、時代や状況によっても意義は変わってくる。したがって、まだ都市再開発の意義とは何かという命題に対しては十分な解答を示せておらず、現在でも筆者にとっては重要な研究テーマとなっている。

これら都市開発・都市再開発に関する研究を進めていく中で、不動産デベロッパーの開発展開・戦略を経営面からアプローチする研究や土地利用に関する研究にも従事するようになった。特に、土地利用の研究については、最初は特定

の時点の土地利用構造を分析することで、都市構造の一端を解明する研究を行っていたが、次第に土地利用の動向を長期的に分析することで、その特定の場所がどのような変化を遂げてきたのかを明らかにする研究へと移行していった。土地利用研究の面白いところは、都市の見えない変化について理解できる点にある。一見すると空間的な変化が見られない場所であっても、土地利用の権利関係という目には見えない変化が生じている場合がある。そして、この土地利用など権利関係の変化は土地利用や都市開発などに先じて生じることから、土地利用変化などを予測することも可能である。

さらに、土地利用の売買を通じて、人（個人、組織）の繋がりも知ることができる。例えば、筆者は大阪駅周辺地区の土地利用の変化を長期にわたり分析したが、戦前期の同地区の土地利用には当時の大阪の政財界の有力者（名望家）の多くが相互に土地を売買してきたことが明らかとなった（その中の一人に、NHKの朝ドラで有名になった広岡浅子の娘婿である広岡恵三も登場する）。戦前期の同地区は市街化が進んでいる段階であり、換言するならば、同地区の市街化の背景には大阪の名望家が関わってきたということがいえよう。同様に、京都市の岡崎・南禅寺地区周辺では、全国的に有名な有力一族（岩崎家や山縣家、細川家など）が代々にわたり土地を所有してきたことも読み取れる。

上記の研究の他にも、現代の都市の動向に関わる研究として、土地利用の不法占有の実態や外資系企業の立地変動、大学立地の変化などに関する研究にも従事してきた。

現在、筆者は都市再開発の実施動向をマクロ的に分析することを通じて、バブル経済期以降の日本の社会経済の動態について明らかにする研究や、企業や自治体がツールとして都市開発をどのように認識し、実行してきたのかを明らかにする研究、自治体の都市計画マスタープランを分析することで、各自治体が都市開発をどのように位置付けているのかを考察する研究などに取り組んでいるが、資料収集やデータ入力、分析には時間が掛かることから、長期的に取り組む課題になろう。

以上、筆者のこれまでの研究内容を整理すると、幾つかの変化を経て、現在の研究テーマ・

内容に至っている。第1に、都市における事象を静態的に捉えた研究から、事象の動態に着目した研究へと変化した。第2に、事象の空間的側面にのみを明らかにする研究から、その事象に関わる人(個人、組織)にも焦点を当てる研究へと変化してきた。そして、第3に、特定の事例や特定の空間・場所を対象とする事例研究から、マクロ的な研究へと変化してきた。これらの変化は都市研究、とりわけ都市地理学の近年の研究動向の影響を受けている側面もあるが、特定の事象を明らかにするだけでなく、都市そのもののあり方について論じられるようにならないと筆者の意識の反映でもある。つまり、筆者にとっての都市地理研究の最前線は、地理学の立場から都市論を論じることにある。しかし、筆者にとってこの最前線はまだ先にあり、今後の大きな課題となっている。

法政大学地理学会 Facebookのご案内

昨年度の学会ホームページリニューアルに合わせて、学会のFacebookが開設されています。Facebookでは、学会行事をはじめとした学会に関連する情報を随時掲載しています。このページはFacebook利用者以外でも閲覧できますので、ぜひご利用ください。URLは下記です。学会ウェブサイトからもリンクされています。<https://www.facebook.com/pages/法政大学地理学会/1505168516420356/>

(広報委員長・富田啓介)

〈〈会員の動向〉〉

(2015.12.01~2016.03.31の会員動向です。敬称略、受付順)

【入会者】

[一般]

鈴木 健太郎(神奈川) / 山本 成実(茨城)
番匠 岳大(東京)

[学生]

平岩 教子(東京)

【2015年度退会者】

[一般]

佐藤 照子(茨城) / 桑原 実(神奈川)

〈〈会費納付のお願い〉〉

2015年度およびそれ以前の会費の納付がお済みでない方には、「会費(未納分)納入のお願い」のメモを同封させていただいておりますので、納付の手続きをお願いします。なお、常任委員会での決定により、会費を3年以上滞納している会員には会誌ならびに学会ニュースの送付を停止することになりましたので、ご注意ください。「法政地理48号」に振込用紙が付いております。また納付がお済みでない方は、納付の手続きをお願いします。なお、通常の「払込取扱票」でも手続きできますので、奥付の口座番号(加入者名:法政大学地理学会)をご記入の上、お振り込みください。

本学会は会員皆様の会費によって運営されておりますので、その点をご理解いただき、ご協力のほどよろしく願いいたします。

(会計委員長・小原文明)

〈〈学会ニュース原稿の募集〉〉

法政大学地理学会ニュースに掲載する原稿を広く会員の皆様から募集しております。原稿のご相談は、下記の連絡先までお願いいたします。連絡先:庶務委員会(shomu@chiri.info)

2016年3月31日発行

編集 法政大学地理学会庶務委員会

発行 法政大学地理学会常任委員会

〒102-8160

東京都千代田区富士見2-17-1

法政大学文学部地理学教室内

Fax. 03-3264-9459

E-mail hoseichiri@chiri.info

Web <http://www.chiri.info/index.html>

郵便振替 00170-9-167442